

新校舎建築委員長ハロルド・ウォレス・ハケット氏 神戸女学院岡田山キャンパス造営におけるもう一人の恩人の記録(2)

井 出 敦 子

本稿は『学院史料』第27号に書かせていただいたハロルド・ウォレス・ハケット氏の事績に関する続編である。

1. ハロルド・ウォレス・ハケット Harold Wallace Hackett 年譜

その後の調査により、現段階で把握できているハケットの年譜は以下の通りである。

年譜中の「コーポレーション」とは1920年設立のコーベ・カレッジ・コーポレーションのことである。当時和名では「在米神戸女学院財団」と呼ばれていた。帰米後も学院のために尽力していたことがわかる。

神戸女学院図書館に、ハケットが先に帰国していた家族たちと再会した折の写真が遺されている。一家6人が肩を抱き合って並んでいる。その後、長く日本で仕事をしてきたハケットは、米海軍情報部少佐に任官する。



写真1 1941年、アメリカで再会した一家、
左から長女エリザベス、長男ハロルド・ジュニア、ハケット、次男ロジャー、妻アンナ、三男デイヴィッド
(神戸女学院図書館所蔵)

終戦後の1946年、まだ米国で日本への渡航が制限されている中、アメリカンボードに復帰し、ミクロネシア、日本等にあるボード関係諸施設の戦災状況視察に派遣されたハケットは、神戸女学

ハロルド・ウォレス・ハケット (Harold Wallace Hackett) 年譜

| | |
|-----------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 1894年 8 月 25 日 | 米国ウィスコンシン州で生まれる |
| 1915年 | コロンビア大学卒業 |
| 1918年 5 月 11 日 | アンナ・パウエル (Anna Powell, 1891-1960) と結婚 |
| 1920年 | アメリカンボードの宣教師として夫人と共に来日 |
| 1921年 | 長男ハロルド・ウォレス・ジュニア (Harold Wallace Hackett, Jr., -1980) 誕生 (第二次世界大戦に際しては良心的兵役拒否を選択した) |
| 1922年 | 神戸女学院の財務主管となる |
| 1922年 | 長女エリザベス (Elizabeth Hackett Uchiyama, -2007) 誕生 (日系人と結婚してハワイで暮らした) |
| 1923年 | 次男ロジャー・フレミング (Roger Fleming Hackett) 誕生 (ミシガン大学名誉教授) |
| 1925年 | 三男デイヴィッド・パウエル (David Powell Hackett, -1965) 誕生 (カリフォルニア大学バークレー校教授昇進直後事件に巻き込まれて死亡) |
| 1927年 1 月 | 財団法人神戸女学院の設立に伴い、初代理事の 1 人となる |
| 1929年 12 月 | 新校舎の総建築委員会委員に就任 |
| 1930年 8 月 | 新校舎の建築委員長に就任 |
| 1933年 4 月 | 神戸女学院、神戸市山本通から西宮市岡田山に移転 |
| 1933年 10 月 15 日 | ソールチャペル献堂式の際の聖餐式で執事を務める |
| 1934年 4 月 18 日 | 新校舎献堂式で建築委員会報告を行う |
| 1934年頃から | 神戸女子神学校(現関西学院西宮聖和キャンパス)内の宣教師館に居住 |
| 1940年 6 月頃 | ハワード・アウトブリッジ理事長の辞任により、理事長事務取扱となる |
| 1941年 2 月 7 日 | 湯浅恭三理事長の就任により、理事長事務取扱を免ぜられる |
| 1941年 8 月 | 神戸女学院の理事・会計を辞任して帰米 |
| 1941年 10 月 | 神戸女学院の寄附行為変更についてコーポレーションの承認を取り学院に電報を送る |
| 1943年 9 月 | 米海軍情報部少佐に任官 |
| 1945年 10 月 | 米海軍を退役 |
| 1946年 6 月 | アメリカンボードに復し、関係施設視察のため来日 |
| 1946年 7 月 6 日 | 神戸女学院を訪問し、理事との懇談会に出席 |
| 1949年 6 月 | 国際基督教大学(ICU)の初代財務副学長に選出される |
| 1951年 2 月 23 日 | 学校法人神戸女学院最初の理事に選任される |
| 1952年 4 月 29 日 | 国際基督教大学献堂式で建設関係の経過報告を行う |
| 1953年 4 月 1 日 | 国際基督教大学開学 |
| 1955年 10 月 12 日 | 神戸女学院創立80周年記念式典に出席し、祝辞を述べる |
| 1957年 5 月 21 日 | 健康悪化のため、国際基督教大学および神戸女学院の役職を辞して帰米 |
| 1958年 1 月 5 日 | ハワイにて死去 |
| 1958年 1 月 17 日 | 神戸女学院で学院葬が執り行われる ボストン郊外ニュートン墓地と八王子市上川霊園とに葬られる |

院を訪問し、学院の再建復興に関わる関西在住理事との懇談会に出席している。

1949年、新しく設立されることとなった国際基督教大学の財務副学長に選出され、その基盤整備に関わるようになった。2013年のキャンパス移転80周年に際してビデオレターによる祝辞を送ってくださった次男ロジャー Dr. Roger Fleming Hackett はそのことについて「父は岡田山キャンパス造営の経験をICU 設立に活かした」と語っている。

一方、1951年、新たに学校法人となった神戸女学院の理事に選任された(戦前は学院会計として役職上の理事であったが、戦後は在米神戸女学院財団選出の理事となる)。また、1955年10月12日の創立80周年記念式典に出席し、祝辞を述べている。

1957年健康悪化のために帰米し、1958年1月5日、ハワイにて死去、63歳であった。

2. 八王子市上川霊園への墓参

神戸女学院岡田山キャンパス造営に関わった3人のアメリカ人の墓所は日本にある。大阪で生まれ、新島襄から幼児洗礼を受けたデフォレスト第5代院長は、両親がキリスト教伝道に尽くした地、宮城県仙台市の仙台輪王寺境内にある仙台北教会の墓地の一角に両親と共に眠っている。

後に日本国籍を取得した設計者ヴォーリズは、滋賀県近江八幡市の恒春園・近江兄弟社霊園に、妻である一柳満喜子やアメリカから呼び寄せた彼の両親、そして近江兄弟社の仲間たちと共に眠っている。そして、建築委員長のハケットの遺骨の半分は遺言により日本に送られ、東京都八王子市にある上川霊園内の国際基督教大学・教会納骨堂の、ルース・シーベリー女史 Miss Ruth Isabel Seabury に続く二人目の納骨者となっている。



写真2 創立80周年記念式典の日の講堂前 前列左から難波照(院長夫人)、メアリー・ライマン(Dr. Mary Ely Lyman)、アンナ・ハケット、後列左からハケット、難波紋吉第7代院長(Dr. Roger Fleming Hackett 所蔵)

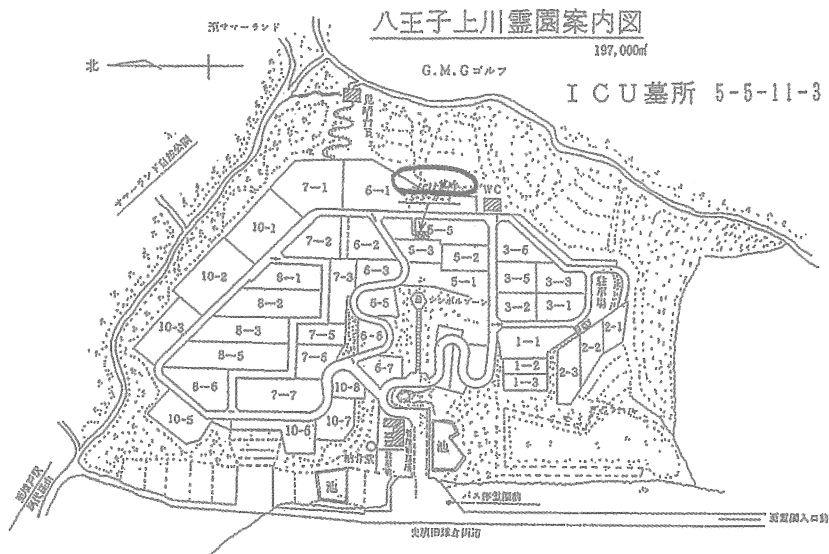


図1 東京都八王子市上川霊園案内図（国際基督教大学提供）

ハケットが太平洋の東と西に「分骨するように」と遺言したことを知って、せめて日本にある墓所は一度訪ねてみたいと思っていた。2014年夏、召天者記念日に墓前礼拝が行われることを知り、同年11月2日(日)に東京都三鷹市の国際基督教大学教会の聖徒の日(召天者記念日)礼拝と、八王子市上川霊園内の同教会納骨堂でおこなわれた墓前礼拝に列席させていただく機会を得た。

国際基督教大学の礼拝堂は、1954年にヴォーリズ建築事務所の設計により竣工、その後1960年にレーモンド建築設計事務所による増改築が行われている。施行はいずれも大成建設である。午前10時30分からの礼拝の後、貸し切りバスに乗り込み、八王子へ向かった。車中、当日納骨が行われる召天者の学友の方たちからは、開学間もない頃に一緒に学んだ方々ならではの親密な連帯感が感じられた。納骨堂は、上川霊園内の見晴しのよい高台にあった。この眺めを生前のハケットは見たのだろうか。午後2時から始まった墓前礼拝には、自家用車での移動組を含めて多くの参列者があった。みなさんと讃美歌を歌い、祈りを合わせ、献花の列に加えていただき、納骨堂内部で銅製の慎ましい遺灰箱を

確認させていただいた。墓参の願いがこうした形でかなえられたのは本当にしあわせであった。



写真3 東京都八王子市上川霊園
内 国際基督教大学・教会
納骨堂

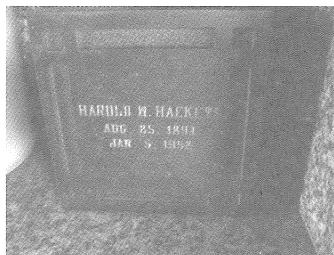


写真4 ハケット氏の遺灰箱

3. 米国マサチューセッツ州ニュートン ニュートン・セメタリーへの墓参

ハケットの米国の墓所がマサチューセッツ州ニュートンにあるニュートン・セメタリー Newton Cemetery であることは、お墓を調べるサイト、“Find A Grave”を検索して承知していたが、実際それがどのあたりなのかについては認識できていなかったし、将来訪ねることができるとも思っていなかった。

2015年9月、同志社大学人文科学研究所で新島研究に携わる方たちが企画した「新島襄の足跡を辿るボストンツアー」に参加させていただくことになった。出発前の説明会で、ボストン郊外ニュートンにあるアンドーヴァー・ニュートン神学校訪問が旅程に入っていることを知った。それはもしかしたらお墓の近くなのではないだろうか。調べてみたところ、車でなら神学校から10分ほどの距離であった。早速ニュートン・セメタリーにメールで墓苑内の墓地の場所を問い合わせたところ、すぐに親切な返信と共に詳しい地図が送られてきた。

団体行動中のことでもあり実現できるかどうかわからないまま旅立ったが、2015年9月14日(月)、現地ガイドの長島氏の行き届いたアレンジのおかげで、

みなさんが昼食のために解散している時間を使って墓地まで案内していただき、ハケット夫妻の墓石の前に立つことができました。

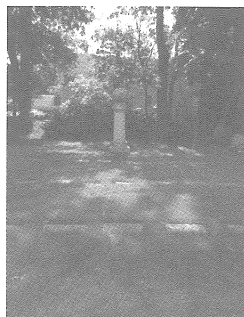


写真5 I-South 地区
にあるアメリカン
ボードの墓地

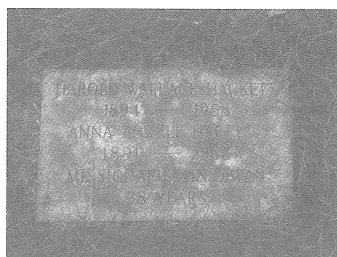


写真6 ハケット夫妻の墓石
(写真5の手前の列の中央)

この旅行の間、新島ゆかりの方々の墓地をいろいろ訪ねたが、荒れた感じのする墓地もままあった中、この墓苑はたいそう手入れが行き届いていて、美しかった。ハケットが、なぜボードの共同墓地を墓所に定め、その墓石に“Missionary in Japan 38 Years”と刻ませたのかをあれこれ考えているが、それはまだ形を成していない。

余談ながら、墓参が叶った同じ日、午後の自由時間にボストン公共図書館のサージェント・ギャラリー（中央館の3階に、米国の画家ジョン・シンガー・サージェント John Singer Sargent の *Triumph of Religion*、宗教の栄光を称えるという壮大なテーマの元に描かれた壁画群が飾られている）を訪れ、学院の図書館東面の壁に掲げられている『預言者たち』

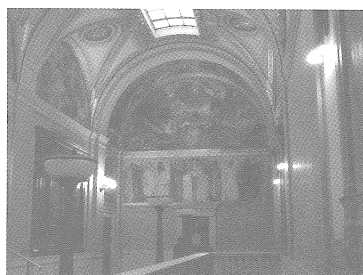


写真7 ボストン公共図書館サージェント・ギャラリーの『預言者たち』

ち』の原画との対面を果たした。館内を巡っていて、1895年に建てられたこの中央館の造作の素晴らしいところが、岡田山の校舎のあちらこちらに巧みに取り入れられているようだと感じた。アメリカンボードの本部が置かれていた町の図書館の佇まいは、キャンパスの造営史を考えるうえでたいへん興味深い。

附 記

前稿をお読みくださった宗像千代子氏(中高72回生、ICU3期生、元図書館事務長、前列左端)が、「ハケットさんのお宅の庭で撮った写真がありますよ」と一枚の写真を貸してくださった。

上野田鶴子先生(中高71回生、ICU2期生、NPO法人日本語教育研究所理事長、後列左から2人目)は、ハケットさんのお墓探しにもご協



写真8 1956年6月 三鷹市国際基督教大学構内のハケット氏宅での集合写真
(宗像千代子氏所蔵)

力くださった方である。先生は私のインタビューに応じてくださり、「美しいキャンパスにお洒落な学生たちがいた神戸女学院から、殺風景な野原に校舎や寮は建築中、戦後のことで年令もばらばらな学生たちがいる新しい学校に行つて、最初は戸惑ったけれど、すぐになじむことができた。まだまわりに何も無い時代で、週末は構内にあった先生たちのお宅をみんなで訪問していた。神戸女学院から入学したのは二期生の私たちが初めてで、まだお元気だったハケットさんご夫妻(後列中央がハケット夫人)や、武田清子先生(J54回生、国際基督教大学名誉教授、前列右から2人目)、天満美智子先生(女57回生、当時は国際基督教大学英語科助手、元津田塾大学学長、前列右端)に大事にいただいた。ミシガン大学大学院に留学したのは、ハケット氏の次男のロジャー・ハケット先生が山懸有朋に関する論文を書いていらした頃で、ご自宅の書斎で文献解読のアルバイトをしていた」ことなどをお話くださった。前述の墓前礼拝の折も、先生

とご一緒させていただいた。思いがけない出会い以来、いつも助言やお励ましをいただいている。

2015年11月、長(武田)清子先生が湯浅八郎国際基督教大学初代学長についてお話しになるのを収録する現場に立ち会わせていただいた。今もデフォレスト先生との出会いを大切になさって、凜としておられる姿に感銘を受けた。御年98歳の先生にお目にかかる機会に恵まれたのは、同行をお許しくださった、M. ウィリアム・スティール教授はじめ国際基督教大学のオーラルヒストリー収録チームのみなさまのおかげである。

2014年10月12日の「重要文化財神戸女学院指定記念講演会」の時にお目にかかり、お話しさせていただくようになった、中上川マリ氏(女61回生、湯浅恭三元理事長：在任1941－1949、1965－1973の長女)は、ハケットさんが面白い方だったことや、毎朝坂道を登っている時に、息子さんたち(Hackett boys)が猛スピードの自転車で下って行くのとよくすれ違ったことなどを教えてくださった。

多くの方々のご厚意のおかげで本稿を起こすことができたことに、心より御礼を申し上げたいと思う。

なお、今回の年譜作成、記録の行間を埋めて行く作業は、総務課所蔵の古い会議録について、2015年秋に総務課および史料室と合同で保存のための予備調査を行った余得が大きいことを記しておきたい。

参考文献

DeForest, C. B., *The History of Kobe College*, Kobe College, 1950

和島芳男『神戸女学院八十年史』神戸女学院、1955年

武田清子『未来をきり拓く大学』国際基督教大学出版局、2000年

『12月8日をわすれないで』国際基督教大学アジア文化研究所、2012年

『建物に見る ICU の歴史』国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、2014年

(院長室課長)